



**Data**

監督・脚本：大森立嗣  
 原作：今村夏子『星の子』（朝日文庫/朝日新聞出版）  
 出演：芦田愛菜／永瀬正敏／原田知世／岡田将生／大友康平／高良健吾／黒木華／蒔田彩珠

### ■■■ショートコメント■■■

◆本作は芥川賞作家、今村夏子の『星の子』を大森立嗣監督が芦田愛菜を主演に起用して映画化したものだが、私は作家・今村夏子も知らないし、2004年生まれという女優・芦田愛菜も知らない。

知っているのは、その両親役になる俳優・永瀬正敏と原田知世だが、本作には以外にも高良健吾や黒木華も登場するから、意外に名作かも……。しかし、そもそも『星の子』とタイトルされた本作は、何をテーマにした映画……？

◆冒頭、未熟児として生まれた赤ちゃんが湿疹に苦しむ姿が描かれるが、ある日「金星のめぐみ」という水の存在を知った両親が、わらにもすがる気持ちでこの水で赤ちゃんを洗うと、みるみるうちに病状が改善したからビックリ。こうなれば、父親（永瀬正敏）も母親（原田知世）も、この水が特別な生命力を宿した水であると信じたのは、ある意味当然だ。

ワケの分からない新興宗教を扱った名作には、園子温監督の『愛のむきだし』（『シネマ22』276頁）があったが、本作もその系列……？『愛のむきだし』では、美人女優・満島ひかりや、安藤サクラ、渡辺真起子らの“怪演”が際立っていたが、さて、本作では？そう期待していたが、大森立嗣監督の演出はすべてにわたって抑え気味だし、芦田愛菜の演技も抑え気味。どちらかというと、姉のまーちゃん役を演じた蒔田彩珠の存在感の方が目立ってしまうほどだ。「金星のめぐみ」の効能を信じ込んでいる、永瀬正敏と原田知世の芸達者ぶりは当然だが……。

◆カップのように、頭の上に「金星のめぐみ」で浸したタオルを載せて日常の生活を送り、「金星のめぐみのおかげで、風邪もひかず健康だ」と信じ込んでいる両親の姿を見ると、これは紛れもなく怪しい宗教！周りの人は皆そう思うのだが、当の本人は？また、この両

親の元ですくすくと成長し、今は中学一年生になっているちひろ（芦田愛菜）は？

大森立嗣監督は『さよなら溪谷』（13年）（『シネマ 31』24頁）や『日日是好日』（18年）（『シネマ 43』270頁）等々有名な1970年生まれ監督。そんな彼が今村夏子の原作を映画化するについて挑戦したのは、「主人公の繊細な揺らぎを撮ること」、また、「そこで大切なことは、この作品が『カルト宗教VS家族を救出したいちひろ』という単純な二項対立ではない」ことだそう。

◆なるほど、それもそれでいいのだが、来年1月には72歳を迎えるじいさんになった私には、授業中にハンサムな南先生（岡田将生）の似顔絵ばかり描いている、ちひろの“揺らぎ”が理解できなければ、親友のなべちゃん（新音）や旧友たちとの会話の中にみる「金星のめぐみ」を巡る“揺らぎ”も理解できない。

ある冬の日の放課後、卒業文集製作委員のなべちゃんを手伝っていたちひろは、遅くなったため、南先生に車で送ってもらうことになったが、自宅近くの公園で、緑のジャージ姿で頭にタオルを乗せ、水をかけあう両親の姿を目撃した南先生は、「不審者がいる、完全に狂っているな。」と言い放ったから、さあ、ちひろの“揺らぎ”は？

◆“揺らぎ”ながらも、両親とうまく生活している（？）ちひろと違い、姉のまーちゃん（蒔田彩珠）は、家庭の変化を嫌って家出を繰り返していた。ある日、突然家に帰ってきたまーちゃんは、ちひろと共に“ある秘密”を共有する至福の時間を過ごしたが、なぜか翌朝には、「もう帰りません」とメモを残して家を出ていってしまったから、アレレ・・・。

他方、まーちゃんを介して、母親の兄である雄三おじさん（大友康平）が漸行したのは、水入れ替え事件。つまり、自宅にある「金星のめぐみ」をすべて公園の水道水と入れ替えたわけだ。しかし、そんな“実証”にもかかわらず、ちひろの両親の「金星のめぐみ」への信仰は変わらず、逆により強めるだけだった。そんな事件を目の当たりにすると、さあ、ちひろの“揺らぎ”は・・・？

◆新型コロナウイルス騒動によって日常が一変した今では、本作ラストのような“怪しい宗教サマ御一行”を歓迎する大集会の開催は不可能。しかし、本作ラストには、そんな集会の晩、両親とちひろの3人が父親の提案に従って、海辺で夜空一体に広がる星空を見つめるシーケンスが登場するので、それに注目！

ここでは、父親の「流れ星が見えた！」から3人の静かな会話が始まるが、さて、このラストシーンの意味するものは・・・？

2020（令和2）年10月21日記